

巻頭言

ERP とネットワークコンピューティングが
企業情報システムにもたらすもの

片岡 信 弘

本会出版電子化担当理事 三菱電機情報システム技術センター



現在、企業の情報処理システムの構築に対して大きな 2 つの潮流がある。1 つは、ERP (Enterprise Resource Planning) と呼ばれる統合パッケージを企業情報システムの構築に活用しようとする動きであり、もう 1 つは、ネットワークコンピューティングの企業情報システムへの活用である。ERP は、すでに欧米で多数の企業がこれの活用をしており、日本においてもこれの採用企業が増加しつつある。ERP が大きく脚光を浴びている背景は、ビックバンに代表されるグローバルな企業競争激化の中で、これに打ち勝つために、受注から生産、出荷、アフターサービスまでの一連の企業活動のプロセスサイクルを他社よりも少しでも短縮することが求められているためである。このためには、サプライチェーンを含めた企業のビジネスプロセスを見直すことが必要であり、ERP パッケージがサポートしているビジネスプロセスを 1 つのベストプラクティス (最適解) としてこれを採用することが BPR (Business Process Reengineering) の加速に繋がるからである。また、一方では、受注、生産管理といったそれぞれのサブシステムを 1 つの統合されたデータベースのもとで動作させることにより企業全体のリソースの最適化を図ることができる。いずれせよ、従来は各企業が長年企業内で培い、ここにこそ他社との差別化があると信じていたビジネスプロセスあるいは情報システムに、世の中の標準あるいはでき合いのものを活用していくとの発想は、従来の情報システム構築に対して 180 度の考え方の転換である。

一方、ネットワークコンピューティングの活用は、従来、情報の発信あるいは共有のために活用してきたイントラネット、インターネットを企業情報システムにおいても活用していくものである。これは、地理的に分散した組織に対する情報システムや、サプライチェーンから企業外に伸びる情報システムにイントラネット、インターネッ

トを活用したいという要求と、企業内に多数存在する各種の情報システム、OA システムのユーザインタフェースをブラウザで統一したいという要求の両面より出てきたものである。しかしより重要なのは、ネットワークを通じて、数々のソフトウェアコンポーネントを配布あるいは入手が可能な環境が整ってきており、これを利用して企業情報システムを構築していくことにある。

一見異なる 2 つの潮流に共通していることは、既存のソフトウェアの活用という点である。ERP の活用では、企業の活動における AI 的手法による需要予測といった本当の差別化の一部の部分は除いて、大部分は他社と同じものを採用しようとするものである。一方、ネットワークコンピューティングにおいて重要なのは、JAVA アプレットのようなプラットフォームとは独立なソフトウェアコンポーネントが利用できること、ネットワークを通じて数々のソフトウェアコンポーネントを入手し利用が可能であることである。ソフトウェアの再利用が叫ばれて久しいが、この 2 つの潮流は本格的な再利用に対する大きなマイルストーンになるものと思われる。これにより、ソフトウェア産業も長年の手工業産業の世界を脱して、工業産業に脱皮できるものと信じる。しかしここで重要なのは、ソフトウェアコンポーネントの流布、再利用の推進や ERP を活用した企業情報システムにおける、本当の意味での差別化部分の自作追加、あるいは複数の ERP パッケージを組み合わせた活用などのための、共通のインタフェースの確立である。現在これに対するさまざまな動きが民間フォーラムなどを中心になされているが、従来の国際標準作成に比してはるかにスピードが要求されるものである。情報処理学会もさまざまな標準化活動を行ってきたはいるが、このような動きに対していかに積極的な貢献をしていくかが 1 つの課題と考える。

(平成 9 年 10 月 8 日)